



## 「やった」「できた」という達成感が 爆発的な成長力を引き出す

【江澤教育長（以下：江澤）】まず、今の子どもや現状に対する認識、学力低下の背景について、ご意見をお聞かせください。

【陰山先生（以下：陰山）】日本の教育が非常に悪くなったと言われて随分たちます。いろいろと取り組んでみたけれど状況は改善されないまま今日に至っていますが、私はその責任は学校だけが負うのではなく、家庭、社会にもあると思います。学校だけ改革しようとしても無理があるのです。今回の山陽小野田市の取組みは、家庭は家庭で「生活改善」を、学校は学校で「学力向上」を行い、それぞれの役割を果たしていこうという試みです。そもそも生活習慣が崩れ、子どもから元気がなくなったことが、すべての教育問題の根源にあるわけで、それを山陽小野田市においては市をあげて、子どもの元気を「生活改善」を通じて回復していこうということですから非常に大きな挑戦といえるでしょう。「学力向上」に効果的と言われる“百ます計算”にしても、子どもが伸びていくには、“元気”という条件は欠かせません。家庭のあり方によって、学校の取組みは同じでも、全く違う結果が出るわけです。家庭と学校の連携に着目した今回の山陽小野田市の取組みは、長期間にわたる日本の教育の停滞を打ち破る大きな突破口になるのではないかと期待しています。

【江澤】学校ではモジュール授業を今年度から始めていますが、この目的・意義はどのようなものでしょうか。

## 【陰山英男氏 プロフィール】

1980年岡山大学法学部卒業後、89年より兵庫県朝来町（現朝来市）立山口小学校教諭として、着任直後より「早寝・早起き・朝ごはん」と「読み・書き・計算」の反復練習を2本の柱として学力向上に取り組む。2003年に広島県尾道市立土堂小学校の校長に公募で選ばれ、カリキュラム編成から学校づくりに取り組み、著しい成果をみせた。2006年4月から立命館大学 大学教育開発・支援センター教授（立命館小学校副校長を兼務）をつとめる。2006年10月より内閣府に新設された教育再生会議委員。

【陰山】日本では、「読み・書き・計算」は江戸時代から重視されてきました。それは単に言葉の力や計算力をつけるという意味合いのものでしたが、モジュール授業は、時間を計り、集中力とスピード感を身に付けていくという点で大きく異なります。脳そのものを鍛えあげていくという、最も新しい分野と言えるものなのです。

【江澤】確かに現場から「子どもの集中力が高まってきた」という声を聞きます。

【陰山】私が注目しているのは、モジュール授業を通じて、昨日より今日、今日より明日と少しずつ成果があがり「やった」「できた」という自己肯定感、達成感を子どもが味わうことができるという点です。中には教師の予想を越えた伸びを見せる子もいます。驚いている教師の顔を見て、子どもがまた「やる気」になってくる。「やる気」の連鎖が爆発的な成長力を引き出すのです。

## 漢字の“前倒し授業”で成果があらわれています

【江澤】モジュール授業の新しい形として、漢字の前倒し授業（次ページ参照）を採り入れています。成果は着実にあらわれているようで、市内全小学6年生を対象に行った漢字のテスト（1年間に習うすべての漢字がテスト範囲）を12月に行ったところ、9月に比べて平均で40%成績があがりました。中には3倍近く成績が伸びたクラスもありました。

【陰山】まず第一に語彙力が増すことがあげられます。学力問題に取り組んでおられる方にお聞きするとみなさんが声をそろえて「今の子どもはとにかく言葉を知らない、語彙力が貧